卵子の老化「知らなかった」

2012.09.13　10:18　日刊紙

◇加齢や病気、不妊一因に／「リスク考え人生設計を」

双子の女児を抱く山口県の女性は「若いうちに高齢妊娠の問題を知っていれば、人生の選択の幅が広がるかも」と話す＝山口県で、五味香織撮影

　看護師の言葉が突き刺さった。「妊娠を後回しにしてきたんですね」

　山口県の女性（４０）は２年前、県内の病院で不妊の検査を受け、卵子の通り道となる卵管が詰まっていることが分かった。卵子と精子が出合えないため、自然妊娠は難しい。

　医師からは不妊治療を勧められた。同時に、年齢が上がるとともに子宮や卵巣のトラブルが起きやすくなり、卵子も老化することを知らされた。「自分の体が、女性であることを否定しているみたいだった」。看護師の言葉がショックに追い打ちをかけた。

　若い頃から家庭を持ちたいと思っていた。交際相手との結婚を考えたこともある。その一方で、仕事にやりがいを感じてもいた。結婚は３７歳。なかなか子どもができず、不妊の検査を受けた。

　不妊治療の専門クリニックに転院し、３回目の顕微授精で妊娠。今年１月に双子の女児を出産し、今は育児に追われる毎日だ。

　もし、若いうちに卵子が老化すると知っていたら−−。女性は今でもそう考えることがある。「勉強や仕事など、いろんなことを頑張ってきた。違う生き方をしたとは思えない。でも、それは自分が出産できたから言えることなのかもしれない」

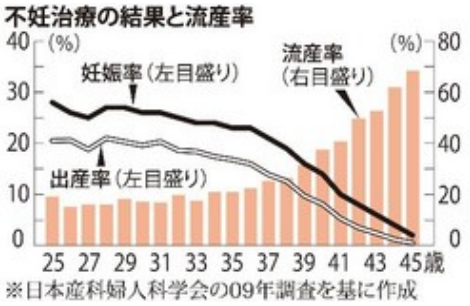
　　◇　　◇

　日本産科婦人科学会の調査によると、体外受精など高度な不妊治療の実施数は０９年に年間２１万件を超えた。治療を受ける人の増加とともに、患者の年齢も上昇傾向にある。

　国立成育医療研究センターの斉藤英和・不妊診療科医長によると、患者の初診年齢は平均３８歳。年々上がっているという。多くが、３０代半ばで結婚や妊娠・出産を考えたケースだ。

　だが年齢が上がると、卵子が老化して、妊娠しにくくなる。そのことを斉藤医師が患者に説明すると、ほとんどの患者が「知らなかった」と答えるという。

卵子の老化の原理は分かっていないが、女性は生まれる前から卵子の元になる原始卵胞を持っており、増えることはないとされる。原始卵胞は年とともに減少し、劣化する。



不妊治療の結果と流産率

斉藤医師は「高齢妊娠のリスクや育児の負担について、きちんと学校で教えるべきだ。仕事を優先したり子どもを持たないのは自由だが、妊娠の仕組みを知ったうえでライフプランを立ててほしい」と呼びかける。

著名人の高齢出産が報じられると「自分もできる」と思いがちだが、斉藤医師は「４０代半ばで高度な不妊治療を受けて出産できるのは１％。まれな例だと理解してほしい」と訴える。

年齢が上がるほど、受精卵の染色体異常が起きやすく、流産率が高くなる。年間約１２００件のお産を扱う横浜市大市民総合医療センターの奥田美加准教授によると、妊娠高血圧症候群や妊娠糖尿病、分娩（ぶんべん）時の大量出血など出産までのトラブルも起きやすくなるという。

同センターで出産した５８１４人を調査したところ、妊娠高血圧症候群になった人は▽３４歳以下４・７％▽３５～３９歳７・１％▽４０歳以上８・２％−−で、３５歳以上が明らかに多かった。奥田医師は「妊娠や出産を先送りしてもメリットはない。早い時期に妊娠・出産できるよう、社会が経済的に支援したり、キャリアを積む上での不安をなくしたりすることも必要だ」と話す。

◇　　◇

不妊を引き起こすのは年齢だけではない。

「卵管が癒着しているかもしれません。不妊の原因になるので検査してください」。東京都内に住む女性（３１）は昨年９月、卵巣腫瘍の手術を終えてほっとした直後、医師から新たな体のトラブルを告げられ、不安でいっぱいになった。

卵巣腫瘍は昨夏の検診で見つかった。大学病院で良性腫瘍の一種と診断され、除去手術を受けたが、卵管のトラブルに加え、卵胞が少なくなっていることも分かった。今は、体外受精による不妊治療を続けている。

検診を受けるまで自覚症状はなかったという。女性は「不妊や卵巣の病気なんて無縁だと考えていたけれど、病気が見つかっていなかったら、と思うと怖い」と振り返る。

慶応大の吉村泰典教授によると、一般に不妊の原因は▽卵巣の中で卵子が育たない排卵障害１５％▽卵管が詰まる機能障害１０～１５％▽受精卵が子宮内膜に着床できない子宮の機能障害５％程度。精子が少ないなど、男性側の要因も３５～４５％を占めるという。

「女性のライフスタイルが変わり、病気も変化している」。聖路加国際病院の百枝幹雄・女性総合診療部長はこう指摘する。

女性の発育が良くなって月経の開始が早まっている一方、出産の回数が減り、生涯における月経回数は増えている。その結果、月経血の逆流が大きな原因と考えられている子宮内膜症に悩む女性が１０人に１人と増加。この病気は卵巣や卵管の働きを悪くして、不妊症の一因になる。また、子宮筋腫は３０代以降の女性に増えるため、かつては出産後に経験することが多い病気だったが、高齢での妊娠が増え、筋腫を抱えて出産に臨む女性も少なくない。筋腫が大きいと、流産や早産を起こしやすい。

「異常を早く見つければ、不妊症を防ぐことにもつながる」。吉村教授は、女性専用外来や、婦人科の検査を人間ドックに盛り込んだ「レディースドック」を行っている病院で、定期的な検診を受けるよう勧めている。

© 2012 Digital Shimbun